

第2回 ひきこもり支援協議会 議事録
(主要な質疑応答及び結果)

開 催 日 時	令和4年9月22日(木曜日) 午後6時30分～午後8時00分
会 場	本庁舎 8階 レクチャールーム
出席者	<p>【委員】文京学院大学人間学部人間福祉学科 教授 中島 修、 東京学芸大学教育心理学講座 准教授 福井 里江、 櫻和メンタルクリニック 院長 山野 かおる、 NPO KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 事務局長 上田 理香、 池袋市民法律事務所 所長 釜井 英法、 高齢者総合相談センター(包括) ふくろうの杜センター長 深澤 雅世、 第6地区青少年育成委員会 会長 根岸 幸子、 長崎第一地区 民生委員・児童委員 副会長 山本 ナミエ、 小杉 順二、小暮 和美、池袋保健所健康推進課 課長補佐 松川 君子、 豊島区民社会福祉協議会 地域相談支援課長 田中 慎吾、 東京都 福祉保健局生活福祉部地域福祉課生活支援担当課長 小澤 耕平 豊島区 保健福祉部長 田中 真理子</p> <p>【オガザバー】NPOインクルージョンセンター東京オレンヂ 三浦 辰也、甲斐 菅原 【事務局】豊島区 自立促進担当課長 今村 宏美、豊島区 自立促進担当係長 柳下 弥、 下浦 修一郎</p>
傍 聴 者	8名
会議次第	<p>開会</p> <p>○ 挨拶(中島会長)</p> <p>議題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ひきこもり UX 女子会の報告について【資料1】 2 ひきこもり状態にある方に関する調査の集計結果について【資料2】 3 広報について【資料3、4】 4 ひきこもり相談窓口での事例等について【資料5】 5 その他 <p>閉会</p>

資 料	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次第 ・ 資料 1 ひきこもり UX 女子会 in 豊島 ・ 資料 2 豊島区ひきこもり状態にある方に関する調査【集計結果】 ・ 資料 3 ひきこもり相談窓口チラシ（案） ・ 資料 4 豊島区ひきこもり居場所マップに係る調査（案） ・ 資料 5 ひきこもり相談窓口での相談事例 ・ 参考資料 1 豊島区ひきこもり支援協議会 委員名簿 ・ 参考資料 2 豊島区ひきこもり状態にある方に関する調査（調査票） ・ 参考資料 3 令和 4 年度第 1 回ひきこもり支援協議会議事録
-----	--

主要な会議内容及び質疑応答について

開 会

（事務局）

- ・ 欠席者について
- ・ 傍聴者の承認について

○ 挨拶 中島会長

ひきこもりのテーマは少しずつ取り上げられるようになった。豊島区として丁寧に調査し、相談の実績も上がってきている。それは皆さんがいろんな形でお伝えいただいている結果だと思っている。

議 事

1 ひきこもり UX 女子会の報告について【資料 1】

（事務局）

- ・ 9 月 6 日に開催。第 1 部は過去にひきこもりを経験した女性からの体験談。第 2 部は当事者と経験者のみのグループトーク。
- ・ 人間関係、メンタルヘルス、主婦、経験談等、テーマごとにテーブルに分かれて意見交換を行った。
- ・ ひきこもり UX 女子会全体の参加者は 51 名。資料 1 のアンケートは第 1 部参加者に対して行ったもの。第 1 部参加者は 44 名、アンケートの回収率は 84%。当事者の参加は 22 名だが、そのなかで 40 代、50 代の割合が多かったのが特徴的。
- ・ 前回第 1 回ひきこもり支援協議会では 20 代と 50 代で相談者が増える M 字カーブがひきこもり相談の特徴となっていると説明したが、今回は M 字の底となっている 40 代が多く参加した。
- ・ 当事者が利用したい支援メニューとして最も多かったのが、同じ悩みを持つ人が集まる場への参加。経験者が利用したい支援メニューも同様の傾向があった。
- ・ 参加者からは、「共感してもらえたのでとてもよかった」「気持ちを吐き出せてとても楽になった」「自分にはこういった場所が合っている」といった意見をいただいた。

（会長）委員の皆さんからこのアンケート結果に対する意見を伺いたい。前回 M 字カーブの話があったが、今回 40 代、50 代の参加者が多いということで、少し違った面が見られたのではないかと。

(事務局) おっしゃる通り相談窓口に来られる方とは違った傾向が見られた。

(委員) UX 女子会の特徴として、第 1 部は家族も入れるが、第 2 部は家族の参加をご遠慮いただいていたと思う。今回のアンケートでは当事者家族の参加が 3 名となっているが、第 2 部については家族が参加したというデータはないということか。

(事務局) おっしゃる通り第 2 部では家族の参加はできない。当事者家族その他の方は、「つながる」待合室に移動したと考えている。ただ、当事者、経験者も「つながる」の方に自由に行くことができるので、どちらを選択するかは本人の気持ち次第となっている。

(委員) とすると、部屋が 2 つに分かれるというイメージか。

(事務局) アンケート調査にある 44 名は第 1 部に参加された方。それから第 2 部に行くのか、「つながる待合室」に行くのかは人それぞれとなっている。第 2 部からの参加、「つながる待合室」からの参加者もあり、その人数は資料 1 には含まれていない。

(委員) このひきこもり UX 女子会は広域連携事業として、他自治体と連携して開催されたのか。

(事務局) おっしゃる通り。多摩・島しょ連携事業として、文京区、清瀬市、調布市といった自治体と共同して行った。

(委員) 他の自治体と一緒にやってよかった点はあったか。

(事務局) 他の自治体のひきこもり支援体制の実態を情報共有できた。当事者にとっては、連携により都合のつく日、気分の乗る日に参加することができたのは大きな特徴であると思う。

(会長) 体調を整えて参加することができたのはよかった。参加する機会をできるだけ増やすという意味でも広域事業の視点はとても大切だ。

(事務局) 第 2 部の出席者は 32 名となっている。

(会長) 第 2 部の方が当事者中心の参加となるので人数が減ることだと思う。

(副会長) 第 1 部だけで 44 名ということでもかなり多くの参加があったという印象を持った。また、アンケートも回収率が 84% ととても高いので、皆さんが声を届けたいと思えるような場だったのだと思う。支援メニューとして「同じ悩みを持つ人が集まる場への参加」が当事者からも経験者からも最もニーズが高いという結果が出たことは大変意義がある。ひきこもり UX 女子会は安心、安全に参加できる場づくりを大切にしてきた実績のある団体なので、これを他の自治体が参考とし、取り組んでいくことができればよいと思う。

(委員) 今自治体として取り組んでいければよいという話が出たが、9月、10月、11月と自分の行きたいタイミングで行くことができるというのは、自治体が継続的に応援しているということか。

(事務局) おっしゃる通り。広域連携事業として各自治体が順番に行っている。

(委員) 来年の予定はすでに決まっているのか。

(事務局) 来年については各自治体と現在調整中だが、未定となっている。

(委員) 毎月どこかでやっているといいのではないかと思う。

(会長) 女子会という意味は大きい。男性から辛い思いを受けている方がおり、女性だけで開く会を続けていく意味があると思う。

2 ひきこもりにある方に関する調査の集計結果について【資料2】

(事務局)

<資料2の説明>

・7月から8月に向けて調査を行った。調査対象者の総数は700名。

(1) 町会長への調査について

- ・ひきこもり状態にある方の年代は30代、40代が多く、次いで60代となっている
- ・近隣住民からの相談により、ひきこもり状態にあることがわかったケースが最も多い。

(2) 民生・児童委員への調査について

- ・4人に1人が「受けていないが居ると感じる」と回答
- ・区の「ひきこもり相談窓口」は約7割の認知度があるが、「豊島区ひきこもり情報サイト」については認知度が約4割弱となっており、両者に差がある。

(3) 青少年育成委員への調査について

- ・ひきこもりに関する相談を受けたことがないという回答が約8割あった。
- ・区の「ひきこもり相談窓口」を知っていたという回答が33.7%ととても低い。これは、町会は区制連絡会に、民生委員には民児協を通じて直接窓口ができたことを報告したが、育成委員には報告ができていなかったことが原因だと考えられる。

【調査票Bの集計結果】

- ・調査票Bは相談を「受けていないが居ると感じる」「相談を受けた」と回答した方を対象に集計を行ったものである
- ・約5割を「相談は受けていない」が居ると感じている人が占めている。
- ・青少年育成委員は子どもの様子を中心にみているのかと思っていたが、40代、50代、60代と幅広く見ていただいていることが調査結果からわかった。

(会長) 大変貴重な調査結果だと思う。これだけ地域の方々がみてくださるのだと。そして、相談に乗っていただいたり、相談につなげていることがよくわかった。しかし、相談、支援を受けている方

が3割しかないことが、高齢者や障害者といった他の分野では考えられず、難しいと感じた。江戸川区の調査では相談者の半数が女性ということだったが、豊島区では男性がやや高めに出ている。また、同居をしている場合、相談者は圧倒的に男性が多い。しかし、単身の場合、男女比はほぼ同じとなっていることに理由はあるのか。

(事務局) 相談窓口につながっている男女比は7:3となっており、家族からの相談がとても多いことから、単身世帯の場合女性のひきこもりは認識されにくいのではないかと考えられる。

(会長) 同居で男性が多いのは、母親が支援者を頼る場合が多いからではないか。傾向として豊島区は単身者が多いのも原因のひとつかと思う。

(委員) 参考資料2の調査票で気になったところがある。第1に調査票がどういった経緯でつくられたのか。「この調査での【ひきこもり状態にある方】とは・・・」あるが、これが誰からの視点で書かれたのか。「仕事や学校等にいかず、かつ、家族以外の人との交流をほとんどせず」の「いかず」という表現は本人の自己責任というようにとらえられる。「ほとんどせず」についても同じで、仕事や学校に「行きたくても行けない」ととらえることが必要である。かつ家族以外との交流をほとんど「しない」のか「できないのか」を読み取ることが出来ない。中立的に書くのであれば「家族以外の人との交流がほとんどなく」と書くべきである。家族以外の人と交流を持ってないということが本質的なので、②「時々買い物などで外出することがある方」についても「対人交流のない場所であれば出かけられる」が正しいのではないか。本人の意思で行かない、対人交流しないということがあまりにも自己責任的となっている。誰のどういう視点でつくられたのか経緯を教えてください。

(会長) 前回の協議会でかなり議論をしたうえでつくられているものだが…

(事務局) 前回の協議会の時に、様々な視点からひきこもり状態にある方の定義についてご意見をいただいた。「仕事や学校等にいかず、かつ、家族以外の人との交流をほとんどせず」という文言は、国が示しているのでそこから引用した。前回委員にご参加いただければ、より客観的な視点に立った調査票が出来たのではないか。

(会長) 次回は言葉遣いに気をつけるようにしたい。より中立的に、多くの方に関心をもっていただけるようにしたい。

(委員) 問7の設問ア、ウの意図が知りたい。なぜこの設問をつくったのか。

(事務局) 家族の方から自分の子どもにどう声をかけたらよいかわからないという相談をいただいております。地域の方も同じような悩みを抱えているのではないかという意図で設問を考えた。

(会長) 実際に相談を受けた方の声をもとに、調査票の設問をつくったということだろう。

(委員) 設問を読んでアドバイスが必要なのだという印象を民生委員・児童委員が持つのではないか。また、

「他人の事情にどこまで踏み込んでいいかわからない」とあるが、これは「踏み込む」ことを前提としている。しかし、加入、干渉、踏み込むという言葉は怖い言葉である。なぜ地域の人々が相談できないのかという視点がこの調査票にあるならば、隠さざるをえない心情への配慮が大切だ。豊島区だから3割の方が相談できたかもしれないが、相談しようとするタイミングは人によって違う。相手から踏み込まれたことで相談する機会を失ってしまうことになりかねない。だから「アドバイス」「踏み込む」という言葉はとても気になる。話を聞いてくれるだけでも十分なので、何かした方がいいですよというアドバイスはちょっと待ってほしいという思いがある。

(会長) おっしゃるように必ずしもアドバイスが必要というわけではない。一緒に考えるだけで十分だということもある。アドバイスをしなければならないというようにもとらえられる。

(委員) しかし、調査結果から町会長は何かアドバイスしたいと思っていることが判明したのでは。これを踏まえて町会長のその思いを尊重することが大事だと思う。それによってこちらとしても町会長に何か参考になることをお示しすることができるかもしれない。町会長たちも民生委員たちも心情としては何かしてあげたいと思うことはあるだろう。踏み込むことはせずとも、相談を受けたときにこちらから何かアドバイスすることはできるだろうと思う。研修などではとても役に立つと思う。

(会長) この調査票をつくる時もあらゆる立場にたって設問を考えていただいているので、「踏み込む」という表現についても私は理解できる。

(委員) 民生委員、児童委員、育成委員は何か資格があってやっているわけではないが、専門職に近い存在だと思う。しかし、町会長は違う。町会長は色々な問題を抱えており、ひきこもりに関する知見がないのも当然だと思う。だからこそ「なんとアドバイスしてよいかかわからない」「他人の事情にどこまで踏み込んでよいかかわからない」という意見が出てくるのだと思う。自分も今大変な事例を抱えている。20年近く引きこもっている息子がいて、生活保護を受けている母親がすべて抱え込んでいるというケースがある。母親がケガしても、息子が付き添わずひどい事態となっている。まさにこのアンケート結果のとおりとなっている。

(会長) 民生委員は研修を受けているが、育成委員は受けていないということで調査結果に違いが出ているのだと思う。

(委員) 民生委員と育成委員では対象のメンバーが違う。育成委員は地域の人々と長い付き合いになる。育成委員にとってはアンケートの内容はこれからやっていかなければならないことなのでがんばっていきたい。しかし、私たちはひきこもりかなと思って、当人に「学校行ってないんじゃないの」という話ができない。ただ、研修をしていると相手の言葉を引き出すことはできるようになると感じている。町会長は地域に誰がいるかいちいち把握することはできないので、町会長の思いはアンケートに出ているかもしれないが、実際に動くのはだれかという話になるとそれは町会長ではない。役員なり、町会内に住んでいる一部の人々や回覧板を回す人なりが持っている情報をもとにがんばることだと思う。

- (会長) ひきこもりはなかなか相談窓口につながらないというなかで、地域の方々が気に留めていただいていることが重要だと感じている。
- (委員) 資料2(1)町会長の問5「それはどこからの情報でわかりましたか」にあるように、近隣住民からの相談により判明することが多い。困りごと、心配事があれば、町会長のもとに情報が集まってくるとわかった。(2)民生委員・児童委員については、見守りとか声掛けを多くの方がやっていることがみえてくる。そうしたなかで、問4ク「CSWに対して、情報を提供した」という割合が一定数あるように、どうしていいかわからない方に思いを吐き出せる関係があることが私たちCSWの存在意義なのだと思う。地域に住んでいる方々は、自分の言ったことが伝わることで事が大きくなるのではないかと心配している。地域に住んでいるからこそ踏み込めないという事情があるのだと思う。また、相談窓口に行ってみたらという話があるだけでだいぶ違うと思うので、周知啓発も大切だ。
- (会長) 最初に出会ったときに、ひきこもりの話題を持ち出すことは難しいが、2回、3回と会っていくうちにそういったお声かけができるようになるかもしれない。生活者だからこそつながることができるということがある。
- (委員) 認知症についても、周囲が関心を持って一緒に考えてくれる環境になってきたと感じている。
- (会長) 認知症は地域での理解が進んでいく中で関わりやすくなってきたと思う。以前は家族が認知症であることを隠していたが大分オープンになってきた。しかし、ひきこもりについてはまだそこまで理解が進んでいない。
- (委員) 今、それぞれの委員から、言葉の使い方、地域での苦勞、CSWの苦勞、認知症に対する理解等々と苦しい話があった。しかし、こうした苦しい議論をすることに意味がある。特に豊島区内という顔が見える中で話をすることに意味がある。議論の前に調査をして、そのあとに提言が出てきたため、学んだ点が多くある。こういったことは積み重ねていくことが大切なのだと思う。豊島区は熱心に広報にも取り組まれているが、窓口があることを周知するのにこんなに苦勞するのかと強く感じた。普及啓発ということではいろんなチャンネルをやっていくと同時に、地域の中で話が進んで、ひきこもりの窓口があることを人伝で広がっていくことにこんなに時間がかかるのかと。当事者からの意見についても1回の会議だけではなく、積み重ねていくことが豊島区や都にとって財産になると思う。都広報部会のなかで、ひきこもりは「誰にでも起こりうる」のではなく「誰にもでもあること」という表現に変わった。これが支援者にも当事者にも一番伝えるべきメッセージなのだと思う。
- (会長) 豊島区でこうして調査をして話をしていると地域で暮らしている人の顔が見えてくる気がする。市区町村で話すことの大切さを実感する。
- (委員) 当事者である自分の体験として、ひきこもりの人を探すのは難しい。私は20年間ひきこもりだったが相談に乗りに来てくれた人は1人もいなかった。自分がひきこもり相談を知ったのは5,6年前。

ずっとテレビをつけていると、区役所が新庁舎となり4階に暮らし・しごと相談支援センターがあると知った。テレビは嫌でも情報が入ってくるので、これは自分のことではないかと感じた。それをきっかけに区役所に来て、そこで対応した方に親切にいただいたことがきっかけで通うことができるようになり、今では1人暮らしもして仕事もしている。ひきこもりからは必ず立ち直ることができるし、救うことができると思う。その頃は人が怖くてしゃべることもできなかった。積極的にこちらからひきこもりを見つけ出そうという意識でなければ見つけるのは難しいと感じている。自分の場合はテレビがきっかけとなって立ち直ることができたが、窓口の存在が知られていないのであれば、全世帯にアンケートや手紙を送ることで支援内容を周知するとか、相当予算がかかるかもしれないが、きっかけになるんじゃないか。

(会長) とても大事な提案と勇気づけられるコメントをいただいた。

(委員) ひきこもりは以前だったら絶対に言えない、言わないと思っていた。それを言ってしまうと、周囲に広がってしまうことを恐れていたからだがその恐怖心がかえってひきこもり状態を長引かせてしまったと思っている。今は相談しやすい環境も整備され、何でも言うことができるので良い時代になったと思う。

(会長) やはり相談できる場所があるということが周知されることが大切だ。

(委員) この調査結果の全体票から豊島区の地域のなかに温かさがあると感じた。資料2にあるように、町会長や民生委員が「うわさ程度に聞いたことがある」「受けていないが感じる」と回答しているのは、そのご家庭に関心を寄せ、心配しているからだと思う。また、その家庭に風穴がすこし空いているからうわさとして伝わってくるのではないか。風穴が空いていることが、相談につながるためには大事なことだと思う。当事者とそのご家族が相談できる機会と同様に、町会や民生委員の心配を受け止める体制づくりも必要だと思う。

(委員) 前回アンケートの内容や文言について話し合ったが、それでも足りない部分があったと気付かされた。しかし、アンケート調査を迅速に行い、これだけ回答率も高い結果が出たうえでこういう議論ができたのは大変良かった。相談窓口とウェブサイトの周知はまだまだだといえるが、これはアンケート調査をやったからわかったこと。相談窓口とウェブサイトの周知度を上げていくことと相談を受けた側がどんな情報提供をすることができるかについて研修を行うことが、これからやるべきことだと思う。また、ひきこもりを抱える家族の方々への研修会、交流会を企画したらいいのではないか。それから、資料2の7ページ問8の注釈欄にある「ひきこもりの集まれる会」という言葉が引っかかった。「ひきこもりの方々の」というようにすると柔らかい表現になるかなと思う。

(委員) 細やかな思いで地域を支えているのだと感じられた。私たちも繊細に考えていかなければならない。家族だけで抱え込んでいるだけでは次のステップへつながらない。横のつながりができると笑顔も戻り、内面的にも豊かになるので、地域でのつながりはとても大切だと感じている。何かあったときに助けを呼べる関係づくりができればよい。そういう研修、情報交換や交流の場があると地域に根付いたサポートができると感じた。

(副会長) この調査は豊島区で困っている方をめぐる状況を知るためという目的があったと思うが、今回の調査では町会長や、民生委員、育成委員の声が届けられた。その中で私が最も印象に残ったのが「ひとりで受け止められない」という言葉だ。どうしたらいいかわからないが、同じ地域に住む住民同士サポートをするなかで手探りで取り組んでいると感じた。「踏み込んでいいかわからない」というのは、相手への配慮からくるためらいもあるだろうし、自分たちだけでは判断が難しいという思いもあると思う。色々な立場の方々の声もこのアンケート調査に含まれているのだと思った。地域のこういう方々の気遣いや温かさは当事者家族のために大切なので、1人で受け止められないという状況をそのままにしておくのではなく、地域で頑張っておられる方々をエンパワーし、対応のポイントを伝えるなどの取り組みにつなげていければよいと思う。窓口や情報サイトの周知が難しいという話だが、見方を変えればできて間もないにも関わらずこれだけの人が知っているとも捉えられる。これからも周知に取り組んでいければよいと思う。ちなみにお手洗いのドアにDVのステッカーが貼ってあるが、これはとてもよいと思う。このように誰もが訪れる場所にひきこもり相談のステッカーを貼ることも周知につながると思う。

3 広報について【資料3, 4】

(事務局)

<資料3, 4の説明>

- ・相談窓口の周知を図ってきた。
- ・今年度から当事者が出かけるような場所に周知のチラシを配置することとなった。色々と働きかけた結果、ファミリーマートさん92店舗に置いてもらえることになった。
- ・資料3について、案1, 案2どちらがよいか。皆様の意見をいただきたい。
- ・資料4について、どのような記載をすればよりつながりやすいかご意見をうかがいたい。

(委員) 自分ならばストレートに「孤独」「不安」「助けます」と書いてあると飛びつく。しかし、当事者家族がどう思うかわからない。

(委員) 心が苦しくなる感じを受けるのは(案1)。言葉は怖い。相談する場所には温かさが欲しいので、その雰囲気を感じられる(案2)がよい。相談事例について、こういう人と出会えたらいいなという期待をもてたり、ハードルが低いものであれば良いと思う。Case study 1について、「不仲な家族の様子を間近でみているうちに気分が落ち込み、だんだんひきこもるようになっていました」とあるが、気分が落ち込む原因が書かれている文章は避けた方がよい。Case study 2の「乗り越えられる」というのは綺麗事であるという印象を持った。サクセスストーリー風なのはよくない。「辛い時間を何とかやり過ごせるようになった」とか「ひとりのときの孤独感が少し薄れた」といったような表現がよい。

(会長) 広報として載せた事例は経緯が細かく記載され、そこに相談員のコメントが入っている。今回はそれに比べればマイルドになっており、「相談にぜひ来てほしい」というメッセージがメインとなっている。(案1)については、事前にみたとき我々も少し怖い印象を持ったので(案2)も提唱した。

(事務局) 見る人によってとらえ方が違うのと感じている。当事者に向けたものか、家族に向けたものかでも変わってくる。このチラシを手にするのは誰なのかというところで決めていきたい。

(会長) 言葉がダイレクトにある方がよいか、それを辛く感じる人の気持ちを尊重するか。

(委員) 診療所内に色々パンフレットを置いており、その際には柔らかい言葉のものを置くよう配慮している。しかし、患者が持っていくのはストレートな表現のことが多い。しっかりつかんでほしいという切迫感があるのだと思う。従って(案1)のようにストレートに書いてあるものの方がよい。

(NPOインクルージョンセンター東京オレンジ)

ひきこもりについて細分化して考えた方がよい。本人の心の状態により、ひきこもった方がよい人もいる。ひきこもりに関するチラシは、一步外に出てみようかなと思っている人が取っていくと思う。これから社会に向けて一步踏み出す人を対象にして、ストレートな表現にした方が窓口に来てくれると感じている。

(会長) どういう人がこのチラシを手に取り、連絡をしてくれるか考えると、外部とつながろうとしている方ではないか。

(委員) 資料5を読むと、兄弟に対して悩みを抱えている人もいないのではないかなと思う。具体的な文言があるというのはとても大切なこと。自分が相談してもいいんだと思えるように、家族や兄弟姉妹でも相談することができるという一文があればいいと思う。

(会長) 概ね(案1)の方がよいか。ターゲットはこれから社会とつながろうという人とし、対象者本人の兄弟も手に入れることができるようなキーワードが入っているとよい。

(副会長) 耳にやさしい言葉を考えると、Case study 1の「やりたいことが見つかった」というのは少しポジティブすぎるかなと思う。それよりは、「一步踏み出すことを考え始めた」というニュアンスの方がよいのではないかな。Case study 2の「乗り越えられる」も「やり過ごす」や「しのげる」といった表現がよい。辛い時間をなんとかやりくりしていることが滲むような表現に改めた方がよい。

(会長) それを踏まえると広報としまで全戸配布したものの方がよかった気がする。

(委員) メールで相談しようというときに、アドレスが「A0029452@city.toshima.lg.jp」と表示されているが、「00」の部分がゼロなのかオーなのかかわからない。また「lg」についても、「l」がエルなのか1なのかかわからない。

(副会長) 資料4の居場所情報について、個々の居場所情報欄にQRコードをつけるとよい。

4 ひきこもり相談窓口での事例等について【資料5】

(NPOインクルージョンセンター東京オレンジ)

<資料5についての説明>

(事例紹介)

- ・ 支援をするにあたり、大切にしていることが本人へのアプローチと家族へのアプローチ。
- ・ ひきこもり状態は家族全体に問題がある。家族という単位で一つの生き物の存在だと考えている。
- ・ 不安は伝染するので、まずは家族が楽しく幸せに暮らすことが大切である。それが出来てひきこもりになっている本人の状態がよくなる。
- ・ そのうえで、本人は何が苦しいのかを可視化していきたい

(会長) 具体的な問題をこういう機会に共有していきたい。

5 その他

(事務局)

- ・ 第3回は12月に開催を予定している。

6 閉会